

主のご復活、おめでとうございます！

新型コロナウイルスの世界的流行で、祈りの大切さを感じています。世界的危難の時こそ、心を一つにして祈ることが大切だということを教えられているような気がします。主の復活は、祈りの重要性を私たちに指し示してくださっているのではないのでしょうか。ミサにあずかれない状況が一日も早く終息することを願ってやみません。



第44回日本カトリック映画賞決定！

『こどもしよくどう』日向寺太郎 監督 / 2019年作品

授賞式&上映会 2020年6月6日(土) 13:00上映 なかのZERO 大ホール

劇映画『こどもしよくどう』（日向寺（ひゅうがじ）太郎監督／93分／製作・配給：パル企画）が第44回日本カトリック映画賞に選ばれ、その授賞式と上映会が、来る6月6日(土) 東京・なかのZERO 大ホールにて行なわれる予定です。この映画は、なぜ今、“子ども食堂”が必要とされているのかを、子どもたちのまなざしで描いた作品です。厚生労働省の発表によると、現在6人に1人の子どもが貧困状態にあると言われています。本来、子どもたちは私たちの社会の未来であり希望であるはず。その子どもたちが社会のひずみをもろに受けているのです。この作品は、子どもの貧困について考えるひとつのきっかけとなり得る、見逃すことのできない作品です。



夫婦でやっている下町の小さな食堂。息子のユウト（小6）は食べ物に不自由なく暮らしています。ある日、彼は川原に置かれた軽ワゴンの中で暮らす姉妹と出会います。満足にご飯を食べることも学校に行くこともできない親に捨てられた姉妹。ユウトはこの二人を放っておけなくなります。しかし小6のユウトには何をどうしたらよいかわかりません。「いつも見てるだけだろ！」と親に毒づくユウト。それは姉妹を助けることができない自分へのもどかしさの言葉でもあります。しかし、ユウトは悩んだ末にある行動にでます。ユウトと姉妹が交わす視線の痛々しさが観客の胸に突き刺さります。1月に行われたカトリック映画賞選考上映会後の話し合いでは「子どもたちのまなざしが忘れられない」「地味だが心に残る作品」「監督の子どもたちを見る目線が秀逸だ」などと評価されました。シグニスジャパン顧問の晴佐久昌英神父は授賞理由の中で「…私たちは、そろそろ悟らなければならない。いつの時代でも、本当に大切なことをまっすぐに教えてくれるのは、子どもたちだということを」と述べています。事実、この映画では子どもの生きづらさに最初に気づくのは、別の子どもたちです。子どもたちが悩み行動する中から見えてくる希望。それを私たち大人に教えてくれる貴重な作品です。

★新型コロナウイルスの感染拡大の状況により、上映会と授賞式の予定が変更になる可能性があります。

最新情報は、SIGNIS JAPAN web サイト <https://signis-japan.org/> および Facebook にてお知らせします。

★今年は、チケット前売りはありません。すべて当日券です。当日会場にてお求め下さい。

大人 1,000円 / 高校生以下、障がい者（含介助者1名）800円

お問い合わせ SIGNIS JAPAN 事務局 info@signis-japan.org / TEL 090-8700-6860（担当 大沼）

★バリアフリーについて 本編は日本語字幕付き。授賞式、対談は要約筆記、手話通訳付きを予定しています。

インターネットで拓く 新・福音宣教 東京大司教区 主日ミサインターネット中継

私たち SIGNIS JAPAN(カトリックメディア協議会)では、毎年「教会とインターネット」セミナーを開催しています。この2020年3月7日には、第25回目となるセミナーを開催する予定でした。「SNSで福音を響かせる」とのサブタイトルで、主に動画サイトを用いた教会紹介や福音のメッセージを伝えるコツや、他教派も含めた先駆者たちの様々な取り組みをご紹介しますつもりで準備を進めておりました。

ところが、ご承知の通り、今般の新型コロナウイルスという疫病災害が起きてしまいました。先の見通しが立たない中、不特定多数の人々が集まるイベントの中止もしくは延期要請が出され、それを受けてカトリック教会でも「公開のミサが中止」となりました。大人数で教会に集まったのは、灰の水曜日が最後です。結果的に、この四旬節は節制や断食ばかりか、ミサを断食する期間となってしまいました。

今も、ヨーロッパを中心に世界中で猛威を奮っています。テレビでは、2月から今に至るまでコロナの話題で持ちきりの状態が続いています。中国の武漢での医療関係者の奮闘、屋形船での新年会、クルーズ船での隔離などが大きく報じられ、目に焼きついてしまったことと思います。

「公開のミサ」の再開も、再延期が続いています。そのような中、日本のカトリック教会では東京大司教区が先駆けて、菊地大司教によるミサのインターネット配信(写真)が始まりました。期せずして、インターネットセミナーを通して考えたかったことが実現してしまった形となりました。

本来、ミサは実際に集い、交わることが大切です。また、これまでであれば、教会におけるネット配信の需要は、信仰入門講座や講話などが主でした。しかし、今回の疫病は多くの感染ケースで無症状もしくは軽度な症状しかなく、知らぬ間にウイルス保持者として他者への感染源となってしまう恐れがあることが報じられています。他方、ミサに集まる多くの方がご年配の方で、感染すれば重症化する可能性の特に高い方々です。



菊地大司教が折に触れて強調されているのは、「霊的聖体拝領」です。大司教が分かりやすく説明されていますが、祈りを通してご聖体を心の中にお迎えすることで、信仰と愛をもって聖体を受けたいという望みがあれば、聖体の秘跡の恩恵にあずかれるのです。そして、それをより深く実践するために、インターネット配信が用いられたことは、今後書かれる教会の歴史の中でも特筆すべき新たな実践といえるでしょう。

従来であれば、とすればミサのインターネット中継には、反対の声も上がったかもしれません。しかし、昨年の教皇来日、特に長崎や東京での教皇ミサのインターネット中継が話題となったことで、受け止めが変わったように思います。

さらに菊地大司教は、たびたびビデオメッセージを発信され、今回のコロナ禍に対する教会の立場、考えを明らかにし、また信仰生活を励ますメッセージを発しておられます。

誰もが映像を作り配信できる時代ですが、その使い方は必ずしも人間的なものとは限りません。とても便利なツールですが、だからこそ悪用され、匿名性をいいことに人間の尊厳をないがしろにする言動、特に、何かしらのレッテルを貼って一部の人々を傷つけるような言動が目立っています。しかし、そのようなツールを、まさに平和の道具として用いることは、21世紀の福音宣教の方法といえるでしょう。

インターネットの動画サイトに動画をアップロードするには、撮影したままではなく、編集や加工、演出など様々な手間隙がかかります。また、ライブ配信で字幕をつけるには、特別なソフトや、それなりの技術が必要です。

ミサのライブ配信に字幕がついていることには驚きましたが、特に演出に凝っているわけではありません。ミサをそのまま流しているのです。それだけで、大きな効果が得られるのはミサならではのものです。内容を豊かに伝えるための演出なのであって、それ以上のものではないことにも思い至ります。ただし四旬節第五主日からはカメラの台数がそれまでよりも増え、切り替えが効果的に行われています。

今後、カトリック教会においても、このようなインターネット配信による中継という努力や工夫が、福音宣教のために用いられることと思います。そして、今回の東京大司教区の経験はその大きな一歩となることと思います。(インターネットチーム 石原)

賛助会員募集

一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。

会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。

どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN / info@signis-japan.org

会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至